

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：10102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590215

研究課題名(和文) 実習改革・教職大学院との連携を中心とする教員養成プログラムの実践研究

研究課題名(英文) Action-training-research of the teacher education blog lamb in which I cooperate with the center with training reform and a schoolteaching graduate school

研究代表者

津田 順二(junji, tsuda)

北海道教育大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50634565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：教員養成における「学び」の柱は「理論と実践の往還」と言われる。理論は大学でのいわば座学をさすが、実践の中心は「実習」である。より高い教育実践力を養成するために、釧路校として展開する「教育フィールド研究」の実践をもとに充実した教員養成を目指す実習の改革への方略を示す。一方、教職大学院はより高度な専門性を身につける場として今後も増えることが予定されている。学校経営の全体を学びの対象として視野に入れた教職大学院においても実習が課せられている。「実習」を共通項として、実践的な指導体制を確立することが求められており、教員養成と連動した指導の可能性を探る

研究成果の概要(英文)：The pillar of "the learning" in the teacher training is said to be "a street of a theory and the practice". The theory at the university point to the lecture, but the center of the practice is, so to speak, "training". I show stratagem to reform of the training to aim at the substantial teacher training based on the practice of "the education field study" to develop as Kushiro school to train a higher educational practice power. On the other hand, it is planned that the teaching profession graduate schools will increase in future as a place acquiring higher specialty. I am assigned to training in the teaching profession graduate school which classified the whole of the school management into the field of vision as an object of learning. It is pursued in "the training" that I establish the practical instruction system as a common denominator and considers the possibility of the instruction that linked a teacher training

研究分野：学校教育

キーワード：実習改革 フィールド研究 教職大学院の実習 実践的指導力

### 1. 研究開始当初の背景

2006年(平成18年)「今後の教員養成・免許制度の在り方について」との中教審答申では、教員養成の改革に関わって、「社会の大きな変動に対応し、教員の資質能力がより一層高いものとなるようにすることが極めて重要であるとともに教員に求められる資質能力を確実に身に付けることの重要性が高まっている。」としている。そのための具体的な施策として「教職実践演習」科目の新設、教職大学院の創設などが上げられている。一方、日本教育大学協会では、「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトの報告として「体験と省察を基軸としたモデル・コア・カリキュラムの展開」を発表している。その中では、多くの教員養成課程の大学におけるいわゆる「体験」「実習」と同様の意味合いと考えられる)がどのように実施されているかをまとめたものとなっている。

いわゆる「理論と実践の往還」の重要性もこうした調査研究のまとめの中で、確立してきたものである。

北海道教育大学釧路校では、2001年(平成13年)の文科省大学再編プランを受け「学校支援ボランティア」について2003年、釧路市教育委員会との協定書を交わし、学校へのボランティア実践に入りながら、主免実習についても同校で実施させていただき制度を開始した。2004年には北海道教育大学、全学での実践的なカリキュラムの一環として「フィールド研究」を設ける設定をした。釧路校では「ボランティア実践」の延長に「フィールド研究」を位置づけ、教育委員会、校長会との協議を進め2005年より「教育フィールド研究」の本格的なスタートを切った。1・2年目の学生を対象にしながら、実施に当たって金曜日とその時間に充て、学生の運送等の諸準備の整備を行った。併せて、「教育実践論」科目群は、実戦や経験の普遍化を媒介にしながら、理論と実践の往還を図るために設けられた。現在、「教育フィールド研究」「主免実習」「副免実習」の他に「へき地実習」「特別支援教育実習」「介護体験」があるが、実習における理論と実践の往還を更に充実させるものとして、実践的指導力をつける上で、「理論と実践の往還」の中で、リフレクションとして、実習の省察を充実させる方策を検討している最中にある。また、教職大学院の創設について一定の形態が確立する中で、教職大学院の学修と実習が学部での教員養成との関わりや連携の在り方についても明らかにすることが求められている。

### 2. 研究の目的

「理論と実践の往還」が教員養成における実習の、具体的な大きな指標となる。当然のことながら、教育現場は多様な要素を

抱え複合的な活動として、営まれている。学級での授業展開をはじめ、生徒指導や、学校運営に関わる分掌等の業務や、保護者との対応もあろう。学校現場での実習は、そうした全体像を視野に入れたものでありながら、内実は、学級での授業実践が中心に実施されている。もちろん児童生徒に対する指導の中心的な柱は、「授業」であり、そこに「実習」が大きく傾斜することは当然といえる。しかし、学校としての機能や授業以外の学びについては更に「実習」の内容を広げる必要がある。そうした取組の具体的な実践として釧路校としての実習科目「教育フィールド研究」の内容を分析するとともに、創設以来8年目を迎えた教職大学院との連携による教員養成の充実の方向性を探るものである。

### 3. 研究の方法

(1) 学校現場と連携した研究推進と学生への端緒的動機づけ

北海道教育大学釧路校における教員養成としての「教育フィールド研究」において、学生のアンケートから、学校現場での実践的な機会を積極的にとらえ意欲的である。それらが教師力を自ら高めていく動機付けの基盤ともなっている。更に、指導案作成・模擬授業・経験交流などのグループ討議等の指導を受けながら学生相互に交流・検討することが切磋琢磨の機会となり、学生の意欲と実践的な力量を高める条件となっている。これら、学生の相互交流と実践機会を、内発的な動機付けにしながら、大学全体の取組を組織的に展開していくことが教員養成を充実し向上させる。これらを含め、実践的に大学の教師教育活動を全体として高めながら、その効果を検証していく。

(2) 学生の意識変化・成長を意識調査チェックリストに対する多元的自由記述からの分析検討(クラスター分析)

学生の成長を一つ一つの事業ごとの振り返りや感想文アンケートから満足度を測るとともに、諸教育活動を横並びに選択して、印象に残った活動などから相対的な関心度や教育効果をとらえ比較調査することで分析していく。更に自由記述の意識調査から、その結果を内容と、意味ごとに分類し、時系列的にとらえることにより、興味関心と成長度合いの自覚的な内容の再構築した成長度合いをとらえ成長分析していく。

「教職チェックリスト」に対する意識調査の実施、北海道教育大学釧路校第1、2、学年全員に対して、意識調査を実施した。

(3) 他教職大学院における教員養成との連携についての調査

教職大学院との連携については、具体的な資料を有していないことや、他大学の紹介や教育活動の概要にも記されていないことから、直接訪問しての調査となった。しかし、学部教員養成における指導と教職大

学院の連携については、具体的な活動は手  
がつけられていないことから、釧路校とし  
て、独自に構構できる試みを展開した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 教員養成における「教育フィールド研究」の意義と実習改革

教員養成大学における教師教育を推進するに当たり、カリキュラム改革・教育実習の改革改善が求められる。同時に学生の主体性と相互教育力(ピアアドバイザー)・自己開発能力及び自己開発力および大学の教員養成力の双方を高め、総体として学校現場実践に直結する教員養成力を高めていくことが不可欠である。

「教育フィールド研究」、「基礎実習」、「主免実習」それぞれの実習において学校現場を活動ステージとして、現場実践力の向上を図ることに努めてきた。

「教育フィールド研究」(1・2年生)の指

##### 導形態

事前指導「教育実践フィールド科目  
ハンドブック」の利用

活動記録等振り返りの方法についての事前指導(「学び続ける教師をめざして」ステップアップ・チェックリストハンドブックの活用を含む)

学校現場へ訪問、及び活動(基本は毎週金曜日、活動後「振り返り」としての活動記録を提出)

学生の相互評価、省察としての中間振り返り(前期終了後)

学校訪問終了後、各校及びグループ(指定したもの)による総括、及び反省、個人反省等の記録

また、「教育フィールド研究」は2年生後期の段階で、フィールド研究訪問校において「基礎実習」、「教育フィールド研究」を発展させ、「授業観察」、「指導案作成」等を中心的な活動として実施する。)を同一校にて行うこととしている。毎週訪問にあたっての「活動記録」は以下の様式としている。

教育フィールド研究-生活活動記録		(1・2) 題目	活動日	学年	2008年 6月 14日
学年	1	白鷺中学校	学生番号	2008	姓 名
2-2-9	氏名に二回記載がないが、各氏名を記載する。				
目的	教育実践力(基礎-1) 自分の行動と教師の一言であることを自覚し、児童の考えとなる積極的な行動をとることが出来る。				
1 枚時	内容	校内実習			
学 び	中学校の先生と対面しての授業では、講師の仕方のほかに、講師の先生が授業の構成にどうしているか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
2 枚時	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
3 枚時	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
4 枚時	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
総括	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
総括	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
総括	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				
総括	内容	校内実習			
学 び	授業の構成がどうなるか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。中学校の先生は授業の構成がどのように決まっているのか、また、授業の目的も目を向けることができました。				

こうした「教育フィールド研究」、「基礎実習」の経験に立って、3年生としての「主免実習」が実施される。主免実習実施にあたっては、「教育フィールド研究」とは別に以下のプログラムが予定される。

##### 「事前指導」

##### 実習事前指導

実習の概要と実習生としての心得など「教育フィールド研究」との区切りと発展について

##### 4年生からの体験談と交流

学校現場からの期待と要望(現職教職大学院生)

学指導案作成の意義と作成上の留意点(以後8週にわたり、国語科、算数科指導案作成グループワーク)

学級経営の中心的課題とその場面指導生徒指導上の課題とその場面指導

チェックリスト活用及び自己目標管理のポートフォリオ、日誌の活用とその意義

##### 「事後指導」

実習終了にあたって

振り返りと課題の交流(相互交流)

キャリア教育ガイダンス

教育実習と教員採用試験との連続性

キャリア教育ガイダンス

模擬授業の形態及び課題例

教育実習のまとめ

以上のように「主免実習」については、1・2年生での「教育フィールド研究」、「基礎実習」を基盤として、指導案作成に多くの時間を割いているものの、この目標設定とグループワークによる相互の協働の中で意識化を図るものとなっている。

##### (2)「教職チェックリスト」(学習指導能力)に関するアンケートの分析から

教職チェックリスト」に対する意識調査の実施、北海道教育大学釧路校第1,2学年全員に対して、次の要領で意識調査を実施した。

「教職チェックリスト」に記載された257のチェックリスト項目に加え、2008年度から釧路校が独自に付け加えた「教育環境整備力」18項目、合計275項目全てを熟読させる。

これまでの「教育フィールド研究」での実践経験を踏まえて、学生がチェックリスト項目に即した具体的に行動や子どもへ働きかける場面などが記述できる項目を少なくとも3項目を選ばせる。

選び出したチェックリスト項目それぞれについて、学生が行った行動や働きかけを文章で記述させる。したがって、第1学年約2ヶ月半、第2学年は第1学年時一年間に加え次年度には約2ヶ月半、「教育フィールド研究」の実体験を有する学生を対象とした意識調査となる。なお、有効な回答を行った学生数は、第1学年174名、第

2 学年 149 名、合計 323 名であった。

全 275 項目のチェックリストに対して書き出された文章記述の数は 2,697 であった。表 1 には、教師として必要と考えられる 7 つの能力に「環境整備力」をつけ加えた 8 つの能力それぞれに書き出された文章記述数が示されている。

表 1 教師に求められる能力ごとに書き出された文章記述の数

教師に求められる能力	書き出された文章記述の数
学習指導力	570
生徒指導力	604
教育相談力	231
学校経営力	285
地域教育連携力	188
協働遂行力	430
臨床的実践力	251
環境整備力	138
合計	2,697

### (3) 各学年の傾向と考察

#### 第 1 学年

##### 第 1 学年の有する傾向

第 1 学年が書き出した文章を解析した樹形図を見ると、同学年の持つ学習指導力に対する意見や関心は 13 に分類されることが分かった。「指導(13)」、「子ども(16)」、「理解(18)」、「授業(29)」、「フィールド研究(13)」、「ノート(6)」、「答え(5)」、「説明(7)」、「年生(7)」、「声(4)」、「活用(4)」、「勉強(41)」、「パソコン(3)」である。

括弧内は分類された文章数である。このことから、「子ども」に分類される文章数は全文章 166 のうち 16 であり、10%を占め、「授業」に分類される文章は 29 であり、17%を占め、最も文章が多く書き出された分類は「勉強」の 41 であり、25%を占めたことが分かる。これら 3 つの分類に書き出された文章数だけで全文章数の 52%を占めていることから、おおむね学習指導のイメージは子どもの授業中の勉強によって行われると捉えているといえる。

次に、これら 13 の分類はどのようなまとまりになっているのか着目した。すると、「指導、子ども、理解」クラスター及び「その他」クラスターの 2 つに分類されることが分かった。さらに、これら 2 つのクラスターに分類された文章記述の傾向を詳細に検討するために、それぞれ 2 つのクラスターに分類された文章記述の傾向を詳細に検討した。

「指導、子ども、理解」のクラスターに分類される文章記述からは、子どもに向き合

い、子どもが理解する学習指導が必要と捉えていることが分かった。「授業、フィールド研究」及び「その他」の 2 つのクラスターに分類される文章記述からは、フィールド研究における授業観察の実体験を通して、次の諸点が学習指導に必要な要素とおおむね捉えていることが分かる。答えを言う説明ではなく、子どもに考えさせる説明。

勉強は各教科の授業で行う。勉強には、各教科やパソコンを活用した子どもの勉強と犬学生自身の勉強がある。抑揚をつけた声で話す。1 年生にも分かるノート作り。

これらのことから、第 1 学年の学生は学習指導力を「教育フィールド研究における授業観察の実体験を通して、子どもに向き合い、子どもに理解させる」と捉えていることが分かる。そして、そのための要素も数項目挙げている。

#### 第 2 学年

##### 第 2 学年の有する傾向

第 2 学年が書き出した文章を解析した樹形図を見ると、同学年の持つ学習指導力に対する意見や関心は 7 つに分類されることが分かった。「子ども(42)」、「授業(35)」、「机間指導(8)」、「理解(10)」、「説明(53)」、「フィールド研究(6)」、「時間(8)」である。括弧内は分類された文章数である。

このことから、「子ども」に分類される文章数が全文章 162 のうち 42 であり、60%を占め、「授業」に分類される文章は 35 であり、22%を占め、「説明」に分類される文章は 53 であり、33%を占めることが分かる。これら 3 つの分類に書き出された文章数だけで全文章数の 81%を占めていることから、第 2 学年の学生は、学習指導とは、子どもを対象に説明を中心に行う授業と捉えているといえる。

次に、これら 7 つの分類はどのようなまとまりになっているのか着目した。すると、「子ども、授業」、「机間指導、理解」、「説明、フィールド研究、時間」の 3 つのクラスターにまとめられることが分かった。さらに、これら 3 つのクラスターに分類された文章記述の傾向を検討した。

各教科の授業において、学生自らの専門性を活かしかつ子どもの習熟の程度に応じた学習指導が必要と捉えていることが分かる。「説明、フィールド研究、時間」のクラスターに分類される文章記述からは、教育フィールド研究の実体験を通して、板書に関しては字の大きさや濃さなどに注意しながら説明して授業を行う必要があると捉えていることが分かる。

これらのことから第 2 学年の学生は「教育フィールド研究」の実体験を通して、次の ~ から学習指導力を捉えていることが分かる。授業は主に子どもを対象に行われる。板書の字の大きさや濃さなどの指導技術に注意しながら、子どもに説明を

行う。学生自らの専門性を活かしながらも、習熟の程度に応じた各教科における学習指導を進める必要がある。個に応じた指導を大切にす視点から、机間指導を通して子ども一人ひとりの特徴を理解することが大切である。

「教職チェックリスト」を構成する教師として必要と考えられる能力のうち「学習指導力」に関して学生が書き出した文章にクラスター分析を加えた結果、釧路校の学生は学年が上がるにつれて、次のように「学習指導力」に対する認識が変化することが明らかになった。

第1学年段階では、教育フィールド研究における実体験を通して、見たことや聞いたこと、あるいは気付いたことなどの主観的な見方や考え方で「学習指導力」を捉えている。第2学年段階では、子どもに対する実際の指導場面における指導対象の明確化と指導技術に関する現象が捉えられはじめるとともに、学習指導がどうあるべきかを具体的に客観的に考えられるようになる。

これらのことから釧路校の学生は、学習指導に対して、学校や教師の全体状況を捉える段階から、学年が上がるにつれて学習指導に関連した授業や生徒指導に焦点化した教師の行為の課題が捉えられるよう認識が深まる。加えて、指導の課題に関しては、個別指導から全体指導へと順当な認識の広がりが見られる。一方、学習指導の場面においては、全体指導を行いながらも、個々の子どもの異なる状況にも配慮しなければならないことに気がついていく。その点では、個から全体へ、そして全体から個への関係性が捉えられるようになっていく。このような認識の広がりや深まりを考えると、第1学年時から漠然とであっても、学校の全体状況や教師の指導の全体的な流れをとらえることは、教師教育の重要な契機となっているといえる。全体の状況が認識されているからこそ、各々の焦点化された課題意識もトータルにとらえることができる。

(3) 教職大学院と学部教員養成の連関について他大学における現状を、教職大学院を基軸とした調査から

創設から8年目を迎えた教職大学院において、教職大学院が「高度教職実践専攻」としてより専門的に教育実践の諸相について理解を深めるとともに実践者としての具体的な力量向上を目指すことをねらいとしている。このことは学部における教員養成と連携して指導を計画にすることによって、より濃密な実践的な力量を形成することが可能となることは明白であるが、その具体的な連関について他大学での状況を把握するとともに、本校における教員養成としてのプログラムにどのような関与や連携があるかを教育活動の具体的な実施を通して明

らかにしていく。各地の教職大学院での大きな課題になっているものの中心は概ね定員数確保から現職教員の派遣を中心とした教育委員会との連携をどのように進めるか、現職、ストレートマスター含め「実習」の内容と推進であった。

それぞれの大学での創意工夫した形態、構成が見られたが、教員養成とは直接的な連携は、皆無であった。そこで、釧路校としては、教職大学院が、夜間での講義を実施していることや、現職院生の協力も有り、学部「主免実習」事前指導において、現職教職大学院生から「実習ガイダンス」の指導を行った。

(資料)

「私の教育実習の反省点+こうしておけばよかった」(M1 現職)

「教育実習に向けて～教師の姿勢」(M1 現職)

具体的な学校現場での実習とは何かを指導することにより、学部実習生にとってよりリアルな状況を想定するとともに、院生にとっては、学校現場と教師としての実践的な内容についての振り返りの場となるといえる。

更に同窓会主催のセミナーへの院生参加によって実践的な交流を通しての学びの場として積極的な意見交換が実現した。

(4) 小括

教員養成にとって極めて重要な「理論と実践の往還」にあって「実習」は実践を担う中心である。釧路校での1・2年生での「教育フィールド研究」の意義の大きさは、単に「主免実習」の内容を深めるのみにとどまらず教師という存在それ自体に立ち向かう普段の教師としての姿勢を育成することに繋がる。同時にそうした大学としての制度としての確立が、学生相互の学びと研究を促進する意味を持つことが示された。また、教職大学院との関連では、いまだ未知の分野でありそのためのカリキュラムや運営についても整備が求められるであろうが、「実習」を接点として構想することが今後の課題となろう。「実習改革」について釧路校では、とりわけ「理論と実践の往還」の「還」すなわち全体としてのリフレクション「振り返り」と日々の学修との連動をどう図るのかを更に吟味検討し、改善の道を探っている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{ 雑誌論文 } (計 件)

{ 学会発表 } (計 件)

{ 図書 } (計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

津田順二 (Junji Tsuda)  
北海道教育大学大学院教育学研究科 教授  
研究者番号：50634565

##### (2) 研究分担者

八木修一 (Shuichi Yagi)  
北海道教育大学大学院教育学研究科 教授  
研究者番号：20611164

玉井康之 (Yasuyuki Tamai)  
北海道教育大学大学院教育学研究科 教授  
研究者番号：60227262

安川禎亮 (Sadaaki Yasukawa)  
北海道教育大学大学院教育学研究科准教授  
研究者番号：50710753

森健一郎 (Kenichiro Mori)  
北海道教育大学大学院教育学研究科准教授  
研究者番号：70710755

##### (3) 連携研究者 ( )

研究者番号：